

洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内
洛友会
〒606-8202
京都市左京区田中大堰町49
075-701-3164

迎春

一九九九年一月一日

洛友会役員

会 長	副 会 長	副 会 長	副 会 長	東 京 支 部 長	關 西 支 部 長	中 部 支 部 長	中 国 支 部 長	四 国 支 部 長	九 州 支 部 長	北 陸 支 部 長	東 北 支 部 長	北 海 道 支 部 長	常 任 幹 事	常 任 幹 事	常 任 幹 事	事 務 局
近 藤 文 治	大 嶋 幸 一	池 上 文 夫	田 丸 啓 吉	三 橋 堯 三	安 井 貞 三	大 野 貞 三	松 谷 健 一	近 藤 耕 三	大 園 繁 治	西 村 尚 和	大 家 義 寛	池 内 義 則	木 村 磐 根	上 田 亮 夫	神 戸 俊 博	松 本 博

一九九九年新年に想う

会長 近藤文治



明けましてお目でとうございませす。会員各位にはご機嫌麗しく新年をお迎えのことと存じます。年頭に当たり各位のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

さて昨年、母校京都大学電気系工学科は、創立百周年という記念すべき節目の年を迎え、9月26日、都ホテルに於て、長尾京大総長、土岐工学部長、羽島東京大学教授、西原大阪大学教授等多数のご来賓の出席を得て、盛大な記念式典、記念講演会及び祝賀晩餐会が行われました。記念祝賀晩餐会には500人を超す出席者があり、大変盛んな宴会となりました。特に洛友会

員としては初めて100才を超された中部支部の本多静雄氏(本会顧問)が、杖や介添人の介助もなく壇上に登られ、100才とはとても思えない元気で、スピーチに続いて乾杯の杯を高々と挙げられたとき、祝宴の感激は最高潮に達しました。100才を超された大先輩の乾杯で祝賀会の宴が始まったことにこの上なく深い感激を覚えた次第です。

そして創立百周年という記念すべき瞬間に生まれ合わせ幸運をしまじみと感じました。母校が次の百年に向かつて益々発展されることを心から祈念する次第です。

なお創立百周年祝賀行事の様子は、別冊の「洛友会報特集号」に記載してありますので、重複を避けるためここでは以上の記述にとどめさせて頂きます。

創立百周年記念事業に對しましては、会員各位から多大のご寄付を頂き誠に有難うございました。厚く御礼申し上げます。会員各位からの寄付の目標額を当初三、〇

〇万円とし、記念式典及び百年誌の刊行を中心に使用させて頂くことで募金を開始したのでありますが、最終的には目標を遥かに上回り、約三、八〇〇万円という多額のご寄付頂き感激している次第であります。会長就任に当たって、洛友会の役割の一つとして、卒業生と母校のパイプ役を果たすと申し上げましたが、まさに洛友会の任務を立派に果たせたと感激している次第であります。お陰様で大変盛大な祝賀行事が挙行され、立派な百年誌を刊行することができました。これ偏えに会員各位のご好意の賜と厚く感謝申し上げます。第であります。

なお残金は、「会報別冊」にありますように、企業各社からの寄付金と併せて、母校の大学院教育の充実、技術誌「CUE」の刊行による産学交流の推進等の事業の経費に充当させて頂きます。

さて今年は一九〇〇年代最後の年で、21世紀を指呼の間に臨む新年に当たって過去を振り返り、来るべき21世紀の在り方を考えることは大変有意義なことであると存じます。一九〇〇年と言えは、我が電気工学科創設(一八九八年)の直後に当り、今日に至る100年の間に科学技術は大変進歩しました。有史以来20世紀前途の間に成し遂げた発展に匹敵する進歩がこの一

世紀にあったとさえ言われていま
す。科学技術の進歩が政治・経済
をリードし、社会機構を大きく左
右した時代でした。

我が国の場合、明治の後半から
大正、昭和を経て平成の今日に至
る迄の間、その変貌は筆舌に尽く
し難いものがあります。特に太平
洋戦争の敗戦という未曾有の事件
を経験しましたが、今や我が国は
経済大国として国民は豊かな物質
文明の恩典に浴しています。変貌
の大きさが余りにも大きいだけに
時間の長さをしみじみと感じる次
第です。電気工学科の100年に亘る
発展についても同様のことが言え
ると思います。

20世紀における科学技術の進歩
の中で、社会的に大きな影響をも
たらした発明・発見として、私は
敢えて、半導体IC技術の出現、
核エネルギーの平和利用、及び宇
宙開発の進展の3つを挙げたいと
思います。その中でも半導体IC
技術の進歩は、コンピュータ並び
に通信技術の発展を促し、我々の
生活様式のみならず社会の機構に
も大きな変革を巻き起こしつつあ
ります。その学術的基盤として情
報科学の発展があり、来るべき21
世紀には主役的な役割を果たすと
思われています。

ところが情報科学の分野では、
我が電気工学科は大変大きな貢献

を果たしてきたのであって、わが国
初めてのトランジスタ・計算機の
開発を始め、もう一昨年になりま
すが、情報処理分野の功績により
昭和23年卒の坂井利之名誉教授が
文化功労者の荣誉に輝かれ、さら
に情報科学の泰斗である昭和34年
卒の長尾真教授は京大総長の要職
に就かれるなど、鳥養先生以来の
快挙が続きました。お目出たい限
りであります。両先生の益々のご
活躍を心からお祈り申し上げます。

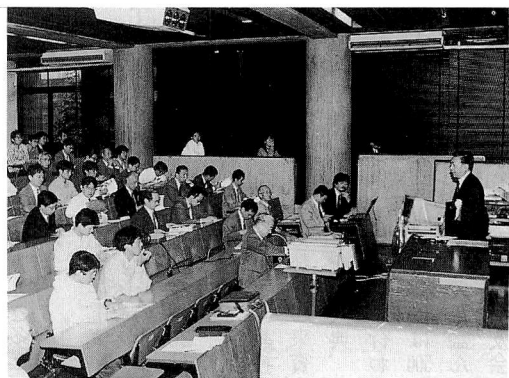
しかし20世紀の科学技術の進歩
は必ずしも手放しで喜べるもので
ないことは、皆様ご承知の通りで
我が国としては忘れられない原子
爆弾の洗礼はその一つであり、最
近では自然破壊・地球温暖化の防
止など問題は山積しています。20
世紀における科学技術の成果の歪
を修正し、科学技術が人類の真の
幸福に貢献することを祈って年頭
のご挨拶といたします。

教室だより

平成10年度

電気系教室懇話会

平成10年度電気系懇話会は、板
谷良平名誉教授、中堀一郎 三菱
電機産業システム研究所所長、三
木弼一 松下電器産業取締役の3
名を講師として迎え、10月30日午



後2時より電気系総合館中講義室
で開催された。

まず、石川教授の司会のもとに、
藤田専攻長が電気系懇話会の歴史
と意義を交えた挨拶を行い、引き
続き講演が行われた。

まず、板谷名誉教授は、「技術・
工学・アカデミズム」というテー
マで、御自身の研究史そのものに
重なる電子工学発展史を顧て、各
電子技術の盛衰の決定原則を御指
摘されるとともに、今後の技術発
展の方向を予測され、研究者の研
究戦略に関する貴重なご提言を頂
いた。また、技術とは経験・ノウ
ハウに基づく技の体系であり、そ
の発展には論理の飛躍または右脳
(非言語)能力が不可欠であり、一
方工学とは技術を体系化したもの
で、論理性・普遍性が不可欠であ
り、左脳(言語)能力が要求される

ことを指摘された。研究者には兩
脳能力が求められ、教育において
もこれに配慮する必要がある事が
述べられた。さらにアカデミズム
とは実益を超えて普遍的な真理を
探究する姿勢であり、実社会の未
来に対する灯台であるとされ、先
見性、獨創性、アカデミズムの追
求が京都大学の研究の使命である
と語られた。

次に、中堀氏は、「産業システ
ムの新しい動向とその研究開発
法」というテーマで、産業システ
ムの特徴、現場での研究開発や
ニーズ・シイズの変化の分析を分
りやすくまとめられた上で、それ
に基づいて産業システム研究の今
後の在り方を展望する、という非
常に体系的な講演が行われた。

特に、従来の研究開発のモデルが
シイズ優先であったのに対し、ニ
ーズとシイズを発掘し、両者によ
って新しい研究開発が「創発」さ
れるというモデルは、興味深い内
容であった。また、このような考
えに基づく開発事例の紹介も行わ
れ、特にビデオを用いたITS(高
度道路交通システム)のシミュレ
ータの説明は産業システムを越え
社会システムへと変わりつつある
研究の動向を示唆しており、この
分野が今後大きく発展することを
期待させる内容であった。
最後の講演者である三木氏は

迎春

一九九九年一月一日

京都大学

電気関係教室

教官一同

財団法人

関西電気保安協会

理事長 長屋 誠一

フジテック株式会社

取締役社長 大谷 謙治

ヤマハ株式会社

松下電器産業 株式会社

「マルチメディア現象と今後の動向」というテーマで、マルチメディア商品群の開発・市場展開史の詳細を解説され、次世代技術の展望をご講演下さった。各世代の代表的商品と背景技術を具体的に示され、各世代が技術揺籃期、急激な発展期、成熟・販売拡大期を経るといふ流れを現象として解説された。この流れの中で、21世紀のマルチメディアは、「個人メディアの電子化・デジタル化」、「蓄積型情報ネットワーク」をキーに、

「システム連結された社会」を実現すると予測された。また、メーカーのあり方として「心血の箱」と称する方法論を紹介され、開発・製造・販売の各部門が共鳴することで活き活きと機能するメーカーでありたいと語られた。後援会への参加者数は、学内、学外から各50名、合計約100名であり、各講演に関して、活発な質疑も行われるなど、盛況な講演であった。

和田俊和教授(電子通信)記

堂下修司教授退官記念行事のお知らせ

本学 堂下修司教授(電子工学科昭和33年卒)におかれましては、来る平成11年3月31日付で、停年退官されることになりました。左記の通り退官記念講義が行われますので、ご案内します。

日時 平成11年2月20日(土) 14:00~16:00
会場 電気総合館大講義室
題目 「知能情報学への道」

また記念講演・パーティは6月5日(土)、リーガロイヤルホテル(京都)で行います。詳細は四月号でご案内いたします。

記念事業に関する詳細は、左記のURLにアクセスして頂くか、
Winme.kuis.kyoto-u.ac.jp/taikan/
河原(075-753-5386)(kawahara@kuis.kyoto-u.ac.jp)までお問い合わせ下さい。

退官記念会代表・池田克夫(昭35年卒)

田丸啓吉教授・中島将光教授退官最終講義のご案内

左記の通り、両先生の退官最終講義を開催致します。ぜひ御参加下さいませようお願致します。

日時 平成11年3月5日(金) 15:13~16:50(中島助教授)
15:20~16:50(田丸教授)

場所 工学部電気総合館大講義室
連絡先 京都大学工学部電気電子工学科
小野寺秀俊 TEL 075-753-5314 FAX 075-753-5343

なお田丸教授の退官記念パーティは7月3日(土)京都ライオンホテルで行います。詳細は四月号でご案内いたします。

交歓スポーツ大会の見直しと新たな交流の模索について

電気電子工学科長 藤田茂夫
電気工学専攻長 牟田一弥
電子物性工学専攻長 石川順三
電子通信工学専攻長 中村行宏
電気系教室の懇話会行事である京大・阪大交歓スポーツ大会は、昭和31年第一回目の交歓会を持って以来本年度まで、実に40数年の長い伝統と歴史を持つ交歓スポーツ大会であり、京大と阪大の電気系教室のそれまでの歴史的な交流を踏まえ、年に一度お互いに集まりスポーツを通じて親睦と交歓の実をあげるといふ目的で行われてきた行事でありました。過去には大変大勢の学生や教職員の参加を得て、それぞれの大学における施設を使用し、交流と親睦の実を上げ、目的を達成し得た歴史がありました。しかしながらここ十数年

来、それぞれの大学の施設の使用が不可能となり、関西電力のご厚意で水無瀬のスポーツ施設を拝借してのスポーツ大会と成らざるを得なくなつたこと、スポーツに参加する選手を教職員層や学部・大学院の学生諸君の層に求めるのがここ数年非常に難しくなり、毎年担当する若手教官の選手を集める

ための負担が非常に大きくなつてきたこと、世話を指揮する教室主任、学科長・専攻長からみて、教職員や学生におけるこの交歓スポーツ大会への参加意欲、参加への積極性の欠如が殊に際だつてきたこと、等を踏まえ、一度この交歓スポーツ大会のあり方についての見直しが必要ではないかということとで、本年度学科長・専攻長が教室教授会に諮りました。その結果、阪大電気系教室との新しい時代にマッチした新たな形の交流・親睦を模索することを前提として、このままの形態での従来型の交歓スポーツ大会の見直しに賛成することが承認されました。そこで、平成10年に行われました第41回交歓スポーツ大会の席上、阪大電気系教室情報システム工学専攻長の西尾章治郎教授に京大電気系教室の考えを述べましたところ、この件を阪大に持ち帰つて教室で相談するということになり、この10月、阪大の電気系教授会で話し合われた結果の報告を受けました。すなわち、阪大としても京大と同様な問題点の認識はあつたこと、従来でのスポーツ大会を見直し新しい形での親睦と交流を模索することに賛成であるとの回答を得るに至りました。

ここに40数年の歴史をもつ懇話会行事である京大・阪大交歓スポ

迎春

一九九九年一月一日

日新電機株式会社

代表取締役社長 安井 貞二

株式会社 S C C

代表取締役社長 松尾 泰

宇宙技術開発 株式会社

代表取締役社長 松尾 泰

電子開発学園

理事長 松尾 泰

高周波熱錬 株式会社

代表取締役社長 大谷 茂久

1ツ大会は、本年度をもって取りやめることになり、新しい時代にふさわしい交流・親睦の場を模索しその実現に努力することに致しました。本報告を通じて洛友会の皆様には何卒ご理解をお願い申し上げます。

(平成10年11月11日)

京大・阪大電気系教室 交歓スポーツ大会報告

恒例の京大・阪大電気系教室交歓スポーツ大会が、7月21日(火)の午後、阪大側の主催で行われました。本大会は昭和31年に始まり、途中2年の中断を経たものの、それ以外は現在まで毎年開催されており、今年度は第41回目を数えております。京大からは、藤田茂夫教授(電気電子工学科長)、牟田一弥教授(電気工学専攻長)、中村行宏教授(電子通信工学専攻長)をはじめ、教職員、学生あわせて80名近い方に参加していただきました。会場は、本年も関西電力(株)のご厚意により、同社水無瀬体育施設をお借りいたしました。

当日は薄曇りの天候でしたが、炎天下を避けることができたために屋外の競技は比較的快適に行うことができました。



軟式野球優勝杯授与

競技の結果は、

- 軟式野球 阪大1ー京大10
- ソフトボール 阪大9ー京大4
- テニス 阪大4ー京大3
- バレーボール 阪大2ー京大0
- 卓球 阪大15ー京大4

でした。軟式野球では昨年、一年の雪辱を果たすことができたが、総合成績は京大の1勝4敗と負け越してしまい、惜しくも三連覇を逃してしまいました。

競技終了後、懇親会が開かれました。先生方のご挨拶の中で、先生が学生時代に京大・阪大交歓スポーツ大会に参加した折りのエピソードが披露され、あらためて本大会の歴史の深さを認識いたしました。

各監督のスピーチでは、本大会の白熱した競技内容に加えて、阪大が2年ぶりに雪辱を果たした形になったために、勝者側、敗者側

とも辛勝・惜敗の思いがこめられました。そのため、昼間の競技に劣らない舌戦が繰り広げられ、優勝カップによるビールの乾杯が練り広げられました。また、学生を中心とした競技参加者の食欲は旺盛で、用意した軽食、ビールは瞬く間に消費されて行きました。

宴たけなわの中、最後に両校の先生の挨拶が行われお開きとなりました。

この場をお借りしまして、大会の運営にお手伝い下さいました皆様を始め、阪大側役員、水無瀬体育施設の方々、大会を盛り上げて下さった参加者の皆様、およびサポートをいただきました洛友会に御礼申し上げます。

(川上養一 記)

会員寄稿

戦前派の学生

生活と戦争体験(II)

河野勝也(昭9年卒)

敵前上陸後に岐阜連隊区司令官が言った応用動作に服することになりました。但し部隊としてではなく、小生個人が命令に従って服務しました。小生の自慢話と思えるかと思いますが、命令によ

て服務したので、悪しからず御了承願います。

応用動作(一)

岐阜歩兵第68連隊の第三大隊長の命令に基づき大隊副官が上陸以来毎日下書きした第三大隊の戦闘詳報の走り書きの原稿と現地の地図を渡され、誤りは校正し、炭酸紙で3部複写浄書する作業でした。南京近くの鎮江に駐留するまで、5ヶ月間の第三大隊の戦闘詳報を一人で仕上げました。

応用動作(二)

60年前の昭和13年1月末鎮江に駐留中、中支派遣軍の総司令部から報道部放送班に向かうよう命令が届き、召集解除される14年10月までの1年半、各種の放送業務に放送班の軍属と共に一兵卒のまま従事しました。その主なものは次の通りです。

- (一)平素は上海郊外に軍が建設した10kWの放送所を運転保守しました。
- (二)抗日テロが強化され、親日派の中国要人が日本租界内のスタジオへ来るのを嫌がったので、米英の共同租界内のシーメンス系のオフィスビル内に一室を借り、サテライトスタジオを設けて、副調整業務に従事しました。軍服では共同租界には入れぬので、一兵卒でありながら背広を調達して、軍服と背広を適宜使い分けしました。

迎春

一九九九年一月一日



株式会社
村田製作所
取締役社長 村田 泰隆



株式会社
日本電池
取締役社長 田中 千秋

株式会社
電気評論社

財団法人

近畿地方発明センター

理事長 近藤 文治

財団法人

応用科学研究所

(三)南京市内の軍が指定した難民区内に、ラジオの共同受信施設を昭和13年8月に建設し、親受信機の利用管理を憲兵隊に依頼しました。

(四)共同租界内の中華系ラジオ放送局に立ち入り検査を行い、ためらめの周波数偏差の修正を命じた。

(五)漢口作戦に呼応して、昭和13年9月戦闘司令部と共に、遠雷のように砲声の轟く九江(南京と漢口との中間)に進出しました。可搬型放送機、ガソリン発電機、ターンテーブル、マイク、レコード等必要最小限度の放送用機材を輸送して放送を開始しました。昼は中波で前線慰問の日本語放送を、夜は短波で武漢向けの対敵宣伝放送を中華語で実施しました。

(六)当時は小型受信機はなく、箱形のスピーカ付き電池式ラジオ受信機を、上海から受領して前線の病院や部隊に配付し、大変喜ばれました。

(七)漢口の陥落が近づいた時、報道部放送本部からの司令により、九江での放送を休止し、漢口まで前進し、対重慶の対敵宣伝放送を再開しました。

(八)南京・重慶で放送用に利用できる建物を物色調査しましたが、重量の大きい(南京の自家発電設備と鉄塔)以外の、あらゆる金

属は、窓枠や配線溝の縞銅板、配線まで外されていました。当時、南京の中波放送の出力は75kWと公表されていましたが、残っていた図面や自家発電機から推定して放送機入力のことのように思われました。

当時の日本の中波ラジオ放送の空中線電力は、10kWが最大で、マルコニーカシーメンス製が実用されていました。小生が上海で保守を担当した10kW放送機は、日本電気で試作中の一式を、軍が買い上げたものでした。

農学部横のグラウンドでは各種のインターハイが行われましたが、正式には運動場ではなく、農学部の生産品の物乾場として登録されていると農学部の学生から聞きました。

以上で近藤先生との比較を終わります。

順序が逆になりましたが、1回生の時は、弱電の実験、2〜3回生の時は強電の実験でした。2回生の時、各人に定格の異なる電気機器が出題され、製図室で製図しました。また、3回生の時の卒業論文は、ワープロもないので、万年筆で清書し、厳しい提出期限に辛うじて間に合いました。

数日後教室から呼出され、学生一人に数人の教官が内容について、種々質問され、ようやくパスしま

した。

最後に一言、我々もコレラ菌や青酸により被害を受けましたが、今さら詳しく書いても、負犬の遠吠えになりますから止めます。昔から勝てば官軍、負ければ賊軍です。昭和10年頃、A(アメリカ)、B(ブリテイッシュ)、C(チャイナ)、D(ダッチ)に締め付けられて爆発したこと、仏領印度支那半島(今のベトナム、ラオス、カンボジア)という奇妙な地名が小学校で教えられたこと、第二次大戦前に独立国は日本、中国及びタイの三国しかなく、他は全部A、B、Dの属領でしたが、今では全部独立したことがせめてもの慰みです。

○「戦中派の学生生活」は今回も休みます。

音感についての雑感

西台 惇(昭32年卒)

最近出版された「絶対音感」(最相葉月著、小学館)を読み、うすうす思っていた事柄が納得できた上に、常人の想像を絶する音感の世界のあることに驚愕した。

音への感覚は自分と人を対比する手段もなく、全く独りよがりの認識であることを承知の上で、私のささやかな音感経験を述べたい。

京都大学交響楽団

電気教室の同級生で京大オケの団員は三名であった。三上泰生君(朝日放送、故人)、梶井信一君(九州電力)と私である。

三上君は幼時から著名なバイオリニスト辻久子さんに師事し、すでに素人離れをしていた。三回生からコンサートマスターを勤め、四回生では定期演奏会でのソリストとしてブルッフのバイオリンコンチエルトを弾いた異才であった。

梶井君は京都の高校連合のオーケストラでコントラバス奏者として活躍していたので御兩人とも入学と同時にレギュラーメンバーとして迎えられた。

私は二回生で吉田の寄宿舎に入り、門前のオーケストラ練習場から洩れる響きに惹きつけられた。最初は遠慮がちにドアの外で、次はドアの中へ、三度目には余っている楽器があれば練習させて欲しいと頼み込んだような白紙団員である。(フレンチ)ホルンだと教えられ、古びた管楽器を賃与された。直ちに十字屋でマウスピース(口金)、ピッチパイプ(「ラ」の基準音を出す笛)と教則本を求めて、団員が帰った後、夜中まで猛練習を開始した。

ホルン

ハーモニカ以来、始めて持った楽器が交響曲等で時には優雅に時

には厳しくその曲の特長を大きくアツピールする楽器であることがわかり、すぐその虜になった。演奏者は大きく開いたアサガオをつましく後へ向けて持ち、トロンボーンのように出しゃばらない。

管は細く、管楽器中で最も長い。ため複雑な倍音が出て音色が優雅である。管の途中にピストン(バルブ)が三つあり管の長さを変えて音階を出す。オーブ(ピストンを押えない)で「ドミソド」が出せる。

困ったのは管の長さから来る特性で、音の高さが非常に決まりにくいことであった。ピアノやフルートで、「ド」を押して「レ」の音が出るはづがないが、ホルンは極端な言い方をすると、唇の絞め方一つでどんな音でも出る。

逆に言えば出すべき音の高さがわかっていなければ出せない。これは楽器というより拡声器に近いものであることに気がついた。

私の音感

子供の頃の音楽環境は、再生式並四球のラジオで放送を聞く程度で、ましてや私の育った農村では音楽教育などとは全く縁の無い社会であった。それでも歌が好きだったので教科書の音符にハーモニカの数字符を書き込んで、どれも

「ハ」調でメロディを覚えた。音名(音符の位置)と音の高さの関係は無視して、すなわち「調」に依らずに相対的音階名だけで歌った。どの調でもほぼ初見で譜が読めるようになっていたので、相對音感すなわち基準となる音が与えられたら、それをキイとして楽譜を見れば音階が発声できる音感はあると思う。

しかし音符を見てその音が頭に浮ぶことは無くピッチパイプ(「ラ」の440ヘルツ音)が必須であった。この笛をプーと鳴らし、その音から上へ下へ音階の梯子を踏んでその調の音階をイメージする。集中しておれば維持できるが大声を出したり、邪まなことを考えると消えてしまう。

人間の音感とはこういうものだと信じて疑わなかったので、一度も他人の感覚を尋ねたことはなかった。

音がわからない

練習の成果として音色も少しホルンらしくなり、長時間吹き続けでも頬が瘰れんすることも無くなった。

三回生からホルンパートの末席で合同の練習に参加させてもらえらる様になった。勿論パート譜は事前に入手し、入念に我がパートの練習をしておいた。

ホルンは交響曲では休みの多い

楽器で一フレイズ鳴らすと三二小節休止などが良くある。

この間に管から湯気と唾をドレインしながら指折り口で休止小節を二五、二六と数えている。私には更に余分なワークを要した。人知れずピッチパイプの音を聞き、その調の和音イメージの確認をすることである。

三二小節目に指導者は両手を大きく挙げ、三三で私目がけて棒を鋭く突き出す。

大切に頭の中で鳴らせて維持して来た音のイメージを消さないように、慎重にアタックと音の響きを合わせる。

トロンボーンはホルンよりなお出番が少ない。しかも前述したように出しやばりで傍若無人である。ここぞとばかり力まかせに吹きまくるそのラッパの開口部が私の頭の上にある。その耳をつんざく音で虎の子のピッチが吹き飛ばされて、困惑の最中に指揮棒が指す。ピストンの位置は合っているも、どんな音でも出る拡声器のこと、頭から音が消えたら最後合うのはマグレしか無い。

忽ちドカーンと指揮者の雷が落ちる次第であった。

この待ったなしの時間の流れの中で正確な音をいかにイメージするか、の苦しみを散々味わいつつ音符を見ればその音が正確に頭の中

で鳴るような能力の存在を夢想し、それに強くあこがれた。

絶対音感

アブソリュートピッチー 前述の著者最相氏の調査によると、絶対音感もいろいろのレベルがあり、例えば次のような能力である。

小鳥の声、鈴の音等すべての音の音名(楽譜上の位置)が判る。

音名の音を正確に発声できる。

ひじで打ったピアノの複数のランダムな音を全て音名で言える。

スコア(合奏の総譜)を見れば、その音が頭の中で響く。

調毎にその和音の特性が色彩感を伴って認識できる。

何十もの楽器の音の重なりの中で一つでも譜と異ると判る。

初歩段階の絶対音感幼児の音感教育によりかなりの率の子供が習得できるといふことである。

創造的な感覚においては、芸術家と素人を比べるべくもないことは当然であるが、生理的に近いレベルの音感覚においても「音がわからない」で苦しんだ私には別次元の世界に思えた。視覚で言えばカラーとモノクロの差であろうか。

音のみならず造形、色彩、味覚等についても、人それぞれの受け留め感覚に測り難い差があるに違いない。個性の尊重のよすがに心すべきことと想っている。

三上君は絶対音感を持っていたに違いない。人から言われて本人が気がつくものらしい。音への彼の感覚をつぶさに聞いておきたかった。

梶井君は中学でブラスバンド、高校からオーケストラであるが、絶対音感はないとの事であった。

緑青の出かかったマウスピースやピッチパイプを手にするとき、「音がわからない」の二年間をまざまざと思い出す。

一方絶対音感が身についた人は歌を聞いても音名が頭を支配して歌詞が理解し難く、これを脱却するには新たな努力を要するとも聞いた。

また良く知っている曲が少しピッチがづれていると強い違和感があり落着かないとのことである。

音楽を文字通り楽しみの手段としたい我々には拘束されない音感の方が良く、絶対音感の無いのがかえって幸せと思ったりもする。

100 km マラソン

中江政美(昭49年卒)

一九九八年(平成10年)6月21日午前5時、気温11℃、小雨の降る中、男一、五〇七名、女一四七名、合わせて一、七五四名のマラソン

・オタクが100km先のゴールをめざして一斉にスタートしました。ゴールまでの制限時間は13時間です。(途中で休んでも歩いてかまいません)。場所は北海道網走市の西に広がるサロマ湖周辺。スタートはサロマ湖の西端の湧別(ゆうべつ)町、ゴールは東端の常呂(ところ)町です。『98サロマ湖100kmウルトラマラソン』という仰々しい名のマラソン大会です。今年で13回目ですが、ウルトラマラソンの老舗、メッカです。ウルトラマラソン・ブームの火付け役としても有名な大会です。

『ウルトラマラソン』とはフルマラソン(42.195km)を超えたものの、という意味ですが、実際には80~100km以上のマラソン大会のことをいうようです。現在、全国レヴェルの大会は年間十数回はあるようです。全国レヴェルというのは、全国的に知られた、という意味です。国体のように県予選を勝ち抜いてきた、という意味ではありません。完走可能ならば、誰でも直接参加できます。42.195kmの完走ではおもしろくないというマラソン大好き人間、暇さえあれば走ってばかりいるジョギング中毒者、走って汗を流すことに至上の喜びを感じる変わり者など、まさにマラソン・オタクと呼ぶにふさわしい人種のための大会です。私

もそのオタクの一人ですが…。

10時間以上も走るとなるといろいろな事が不自由になります。特に食事と排泄です。約5kmごとに給水所があり、水・ジュース・スポーツドリンクなどの飲み物の他に、バナナ・アメ・パン・おにぎりなどが用意されていて、食事の心配はあまりありません。74km地点には、お汁粉のサービスまであります。これがまたおいしい！

問題は排泄です。自然に恵まれた雄大な北海道での大会です。絶好の茂みには不自由しません。したがって、男の「小」は全く問題ありません。勇気ある一部女性の「小」も問題ありません。大変なのは男の「大」と女の「大・小」です。要するに個室が必要となる場合です。公衆トイレや大会本部が設置したレンタル・トイレ(工事現場などでよく見かけるタイプのもの)を使用しますが、数が足りません。特にスタート後1～2時間は寒さや「朝便」を済ましてない人のために大変な混雑で、5～6分以上のタイムロスは覚悟しなければなりません。北海道の自然にそこがねながら、日々の自然にもよばれるのです。

って絶句します。確かにその通りですが、どの距離にもそれなりの「しんどさ」はあります。誰でも、5kmのレースならば5kmを走りきるのしんどいし、わずか100mのレースでもゴールした後は息が切れそうになります。つまり、ゴールまでに走りの全エネルギーを使い果たそうとするからしんどいのです。5kmのレースに100mのスピードで走りきる人はいません。

5kmには5kmのペースがあるはずですが。42・195kmには42・195kmの、100kmには100kmのペースがあります。トレニングによりそのペースを会得すれば完走は以外に簡単です。テレビのマラソン中継を見てみると、「35km地点を通過しました。ここから先がつかいところですよ。勝負どころですよ。」というアナウンスの声を耳にします。その通りです。どんなレースでも、残り20%の距離からつかくなるといわれています。短い距離でも400m走は最後の直線の残り70～80mからが大変だといえます。

100kmマラソンも同じです。途中の50km地点、60km地点を鼻歌混じりで走っていても80km地点を通過してからがしんどい。足の痛みと全身の疲れはピークに達し、筋肉はケイレン直前となります。膝を上げる力や、アゴをあげる気力もなくなり、「遅走り」というよりも「速歩き」という状態になり、棄権して収容バスに乗って帰りたい誘惑にかられます。しかし、職場の連中や家族に「完走して帰ってくるぞ」と勇ましく誓って故郷(クニ)を出たからには、歩いてでも、這ってでも、ころがってでも13時間以内にゴールして「完走」の栄冠を勝ち取らなければ職場の長として、家長(古い!)としての面目が丸つぶれである。

棄権したら楽になれるのにいや、まだ制限時間は十分に残っている(ヒーヒー、ハーハー)。来年もあるんじゃないか(じゃ、この一年間は何だったのか(ヒーヒーハーハー、ゴクン)。無理をしてケガをしたり、心臓マヒで倒れたらおしまいだよ!自分の体のことは自分が一番知っている(ヒーヒー、ハーハー、フー)。皆に内緒できたらいつでも止められるのに、うるさいッ!(ハーハー、フー、フー、オエツ)…。自問自答。まさに自分との戦いである。頼みは、わずかな「根性」とマラソン・オタクとしての「見栄」だけである。

悪魔のささやきを相手にしているうちに、何とか間に合いました。12時間29分19秒。完走一、〇二六人中八〇四位。残り時間約30分、後ろに200名ほど従えての堂々(?)の完走です。ちなみに、完走率は

男68%、女63%です。ゴール直後の感想。「やつと着いた、あーしんど。歩くのもいやだ。よくもまあ、誰がこんな過酷なレースを考えたんだ。もう二度とこめんだ。」10分後。呼吸も整い、落ち着いてくる。「ウーン、ペース配分を間違えたな。前半、もう少し速くても80kmすぎのしんどさは同じだっただろうな。30～40分は短縮できなかったはずだ。でも、練習量も少なかつたしこんなもんかな…。ブツブツ…。今年は失敗だ。よし、来年めざして明日からやり直しだ!」

懲りないオタクではある。

(附)今大会でのスゴイこと

- ・優勝者のタイムは6時間13分33秒。ロードでの世界新記録だそうです。42・195kmなら2時間37分37秒、5kmなら18分40秒、100mなら22・4秒のペースです。そのころ、私は55km付近をテクテク走っていました。
- ・男性完走最高齢は72歳(!!)です。他に60歳代の完走者が46名もいます。13年後には仲間に入りたいと思います。
- ・女性の完走最高齢は71歳(エッ!!)です。他に60歳代の完走者が6名います。おばさんパワーもスゴイですネ。
- ・95km付近を走って(歩いて?)いると、ゴールの方角から2～3

人、上下のジャージを着、リュックを背負ったままこちらの方にやってきて、私の隣を走っている人に何やら話しかけながら一緒に走り始めました。同じマラソンクラブの仲間ようです。ゴールが遅いのでさがしに来たそうです。ということは、この人達、数時間前にゴールし、着替えを済まし、荷物をリュックにつめてから走ってやってきて、遅れた仲間を励ましながら再びゴールをめざしているのです。何という連中だ!。

今年は一九九九年、二十一世紀まで二年となりましたが、長びく不況のため世の中全体が閉塞感に覆れ、なかなか未来への展望が拓けない状況です。

年初めでもありますので、私の勤務する九州電力の最近の研究開発の中から、二十一世紀に夢を繋ぐ技術の話題を提供したいと思います。

今回ご紹介するのは、超電導工ネルギー貯蔵装置(SMES)の開発についてであります。ご承知のように、超電導とはある種の金属や合金を絶対零度(マイナス273℃)

S M E S に架ける夢

徳永 勉(昭51年卒)

今年は一九九九年、二十一世紀まで二年となりましたが、長びく不況のため世の中全体が閉塞感に覆れ、なかなか未来への展望が拓けない状況です。

年初めでもありますので、私の勤務する九州電力の最近の研究開発の中から、二十一世紀に夢を繋ぐ技術の話題を提供したいと思います。

今回ご紹介するのは、超電導工ネルギー貯蔵装置(SMES)の開発についてであります。ご承知のように、超電導とはある種の金属や合金を絶対零度(マイナス273℃)

付近まで冷却すると、電気抵抗がゼロになるという現象です。この超電導現象を電力に応用することにより、電力機器を飛躍的に高性能化することが出来ます。一つは、電気抵抗の極小化による低損失化、大電流密度化であり、これをねらいとした機器が超電導ケーブル、超電導変圧器です。もう一つは、高磁界の実現による高磁界エネルギー密度化であり、これをねらいとした機器が超電導発電機です。

SMEは、この両者を備えた新しい機能を持つ装置といえます。インダクタンスL、抵抗Rのコイルに電流Iを流すと $\frac{1}{2}LI^2$ のエネルギーが貯えられますが、コイルが常電導ですとL/Rの時定数で減衰するため、長時間エネルギーを貯えることができません。しかし、コイルを超電導化すれば抵抗がゼロになるので、減衰することなくエネルギーを磁気エネルギーの形で貯えることが出来ます。この超電導コイルの電流を交直変換装置で交流に変換し、電力系統と連系するシステムがSMEです。SMEは、①エネルギーの貯蔵効率率が80～90%と高い②エネルギーの出し入れ速度が数十m秒と速い③有効電力と無効電力を独立に制御できる等の特徴を有し、負荷平準化や系統安定化、電圧変動補償など、電力系統の様々なニーズ

に対応できる万能型の電力制御装置として期待されています。

当社は一九八二年、電力会社の中で最も早くこのSMEの研究に着手しました。これは、九州が日本列島の西端に位置するという地理的な条件が関係しています。全国の電力系統は串型に連係されており、九州は60ヘルツ系の末端に当たることから安定度面で厳しい運用を余儀なくされ、安定度向上のニーズが高いことが大きな要因の一つであります。もう一つには、技術とは直接関係ありませんが、九州の土壌、気風がそのベースにあることが挙げられます。九州は昔から大陸との交易が盛んで、積極的に新しい物を取り入れるという進取の気質に富んでいます。当社においても、古くは自動給電、最近では配電ロボットなど、他社に先駆けて新技術開発を推進してきました。こうしたチャレンジ精神に支えられ、SME開発を着実に進めることができました。

一九九〇年には、小水力発電所で貯蔵容量8W時という小規模SMEによる系統連係試験を実施し、その有効性を実証しました。一九九四年からは実用化に向けての開発へとステップを進め、一九九八年三月に最大出力一〇〇〇kW、貯蔵容量1W時と世界最大級のSMEを試作、配電用変電

所に接続し本格的な系統連係試験を開始しました。これは研究設備ではありませんが、日本で初めて電力設備として認可されたという点でも意義深いものだと思います。

技術的には、コイルの形状は電力支持の容易な変型D型とし、超電導マグネットはこの超電導コイル6個をドーナツ状に配置したトロイド型を採用、システム構成は信頼性、拡張性に優れたモジュール構成としたことなど、将来の大容量化・実用化に必要な技術ができるだけ採り入れたことが最大の特徴です。今後、長期的な運転を通して性能・効果を評価する予定です。

今回開発したSMEは、福岡市西部の今宿変電所に設置されています。昨年は、電力や大学関係者を始め海外からも多数の研究者が来福、実際に設備を見学され、SME技術への理解に加え人的交流も深めることができました。当地福岡市は、現在日本のみならずアジアの中で最も元気のある都市の一つだと言われています。元気の源は、魅力的な商業施設や文化施設の完成とそれに伴う人の交流の活性化であろうと思います。この福岡市から、SMEを始めとする最先端技術を世界に発信できれば、多様な文化、技術の交流都市としてさらに発展する

のではないでしょう。

二十世紀幕開けの一九〇一年は、現在の北九州市で官営八幡製鉄所が創業を始め、二十世紀の我が国の産業発展の出発となった年でもあります。来るべき二十一世紀にも、再びこの九州から新たな技術発展の歴史を刻むことができれば幸いです。

同窓会だより

卒業60年記念クラス会

去る5月26～27日、昭和13年組の60周年を迎えクラス会を開きました。参加者は小林、片岡、平野(進)、皆川、山口、副島、以上は夫人同伴、伊達、平野(彰)、的場山本及び伊藤夫人の計17名で、先ず京都駅前の新都ホテルに集合し、



一夕語り合いました。

何分80何才の集いでその大部分は腰痛の話題であり、中にいろいろの方法で苦労したベテランより腰痛によくくといふ本の紹介があり皆さんに資料が配布されました。

翌日は朝早くホテルを出発し京都大学の電気教室へ行き田丸先生より教室の近況を聞き、講堂や教室の案内をうけ、ついで市原町にある川島織物の工場を見学した。帯や着物、敷物、タペストリー等国内外の由緒ある宮殿などに納品されている由。当日15米、20米という大巾の敷物を製作中であった。南禅寺で湯どうぶで舌づつみを打ち比叡山へ向う。根本中堂に参詣し、小休止後京都駅に行く。ここでまたの日の再会を約し散会する。山本健(昭13年卒)記

卒業40周年同窓会を

「くろよん」で開催

台風4号が関東を通り過ぎた後の秋晴れの9月4～5日、昭和33年卒業生(29年入学) and/or 33年卒業生の40周年同窓会を「くろよん」で行いました。

参加したのは対象70名中29名と夫人6名合計35名です。9月4日



の夜「ホテルくろよん」で昔の思い出、現在の境遇(殆どが第二の人生へスタート)、カラオケも出果てはゴルフ、健康、孫の話のナイトカ3点セットなどでワイワイガヤガヤ楽しい集いとなりました。この日の前後、オプショナルツアーとして関西電力の黒四発電所、くろよんダムの通り抜けや日向山ゴルフ、安曇野のわさび園、信州そばなどを含めた五つのコースを準備したところ、天気の良いこともあってそれぞれのコースでこのツアーを大いに満喫することが出来ました。次回は20世紀末か遅くとも21世紀初頭に開催する事になりました。

(参加者)大西和夫、加藤隆二、

蒲生容仁、河村吉久、岸本達郎、川北孟、喜利元貞、公江春樹、小西達夫、酒井寿、沢野進、潮崎安弘、白庄司昭※、陶山郁夫、瑞光和之、田丸啓吉、田隆吉、中山道夫※、長崎昌司、西村寅雄※、日向成行、林良一、広豊※、村田久夫、森雅英※、八木晋一※、安原碩人、山崎裕和、山本安喬
 ※印 夫人同伴
 西村寅雄(昭33年卒)記

支部だより

東京支部講演会の開催報告

平成10年10月2日(金)、財団法人・テレコム先端技術研究支援センター 殿(専務理事 奮野信義氏 (S34年電子卒)のご好意により、同センター設立10周年記念講演会に、洛友会東京支部講演会をジョイント開催させていただきました。当日は同センターの賛助会員とともに洛友会東京支部からも多数の参加があり、一、〇〇〇人収容のよみうりホール(東京・有楽町)がほぼ満員の盛況となりました。講師には、ノンフィクション作家・山根一真氏と、我が京都大学電気系教室ご出身の京都大学総長・長尾真氏(S34年電子卒)を迎え、

「情報通信、ビックバンの時代ーR & Dとアプリケーション」をテーマに、現代の情報通信に対するそれぞれの立場からのお考えやご指摘、今後の方向について講演されました。

時代

講師：山根一真氏

1. 「デジタル産業革命と奇妙な子供時代の「肩かけラジオ」による素朴なモバイル体験にはじまり、ご自身の実際の体験にもとづいた貴重なお話をもとに、世界規模の情報ネットワークの発展と活用、さらに今後の展望について、ジャーナリストの視点から分かり易くかつ興味深いお話で、聴衆をどんどん引き込む素晴らしい講演でした。

とくに「気象衛星TRIMM」や「モルジブの珊瑚死滅問題」を取り上げ、情報ネットワークの役割として、地球規模での環境問題への貢献について、強い期待を述べられました。また現代の情報通信の発展を「デジタル産業革命」と位置づけ、「老人介護の点数バンク制度」や「建築CADフリーソフト開発担当者」などを例に、今後の経済への影響について、金銭流通価値の低下とともに、自分と世界との関わり合いや精神的満足感を追求するような、「人の心が価値となる

社会」「商品経済でなく情品社会」が現出することを予想され、とても夢のある情報通信の未来像で締めくくられました。

2. 「独自技術の開発と日本の研究体制」

講師：長尾真氏

近年の日本における「独自技術の開発活性化」の重要性認識による、研究環境の劇的な変化について、科学技術全般の研究・技術開発における日本とアメリカとの間の考え方や社会構造の違いを比較され、今後の日本を発展させるための研究開発体制や方向づけ、大学のあり方について講演されました。

日本の「ばらまき小型投資」に対し米国の「重点集中型大規模投資」が研究テーマを明確にし、失敗を恐れぬ前向き指向を生む環境を備える点や、企業と大学との研究開発の役割の違い、大学と社会・産業界との接触の現状とあり方、「実用開発に結びつく基礎研究」の重要性について厳しく指摘されるとともに、日本が得意とする実用研究の本当の意味での難しさ、きめ細かさなど、日本のコントリビューションを自信を持って国際社会へアピールするよう激励されました。

また「機械翻訳」や「電子図書館」などご自身の研究での経験を

例に、さまざまな専門分野との技術交流、バウンダリを設けず真理・研究興味を追求する「トランスペアレントな心」が新しいアイデアを生むような環境作りの大切さを強調されました。

今後の展望としては、社会や文化の特性を活かした技術開発が重要で、日本の器用さや精密性の追求への期待や、「人間の感性」を捉えた研究が心理学や芸術分野との協力も含め重要との予想を示されました。

最後に、行革に伴うエージェンシー化構想など、大学も評価に晒される時代に、日本の発展につながる研究開発体制のあり方を考える必要性を強調され、締めくくられました。

情報通信関連事業や研究開発に携わる者にとって耳の痛い話も多くありましたが、とても分かり易くかつ有意義なお話を伺うことができました。

講演者の方々に感謝するとともに、平日にもかかわらずご参加・ご協力いただいた洛友会東京支部のみなさまに御礼申し上げます。
 濱野 宏(昭55年卒)記

洛友会東京支部 ホームページ開設のお知らせ

平成10年度洛友会東京支部総会(6月6日)でもご紹介しましたが、洛友会東京支部のホームページを平成10年5月に開設しました(下図)。

URLは、
<http://www2.gol.com/users/hi/rakuyukai/>です。一度ご覧下さい。

本ホームページは、若手も含め洛友会会員へのこのような情報公開を通じて、活動への理解と参画を促したり、活動の活性化や連絡事務の効率化などを図ることを目的としております。そのため、行事予定ならびに結果報告、グループ活動やクラス会の情報等の掲載を行っていく予定であり、既に支部長のご挨拶、支部総会及び講演会の報告等が掲載されております。今後、コンテンツの充実を順次図っていきたく思っておりますので、ご意見ご感想等を頂ければ幸いです。

洛友会東京支部 総務幹事 伊藤八大(S54電II)



中部支部

家族同伴秋の例会

晩秋の奥美濃・飛騨路、せせらぎ街道から飛騨の小京都、高山へ

11月14日(土)は中部支部秋の例会、今年には東海北陸自動車道の木曾川・一宮ICと美濃白鳥の開通と高山と郡上八幡のせせらぎ街道の整備完了で、「高山が近くなった」ということで、「時間的に日帰りか？」と若干の危惧を押しつけての計画となりました。

名古屋駅前を8時出発と言うスケジュールにも、伊勢からご参加のS16年卒の秋田さん、88歳の川端さんもお元気で参加されました。参加人員は19名、やや淋しかったが皆さん常連ばかり、車内のお話

ははずみません。一点の曇りも無い秋晴れの尾張路を大野支部長ご心配のデラックスバスは快適にはしります。と思つたのは名古屋市内だけ、国道22号線の渋滞で木曾川・一宮ICに入れたのは9時10分、予定より30分遅れです。

途中長良川SAで小休止、東海北陸自動車道はトンネルの連続、長良川(この川は日本では珍しいダムが無い川でしたが数年前、長良川河口堰が完成、自然破壊が問題になっていきます)の溪流を垣間見ながらあつという間に八幡ICです。高速道路は美濃白鳥まで開通

(全線の4割くらい)しているが、高山へは郡上八幡から「せせらぎ街道」のほうが良い。将来この路が北上し、高山方面から西へ高速道路が伸びてくると高山がうんと近くなります。

せせらぎ街道に入り最初のせせらぎ、長良川の支流吉田川に沿って北上します。この辺の山は杉の植林で余り黄葉は見られません。途中「磨墨公園」で小休止、(ここは源平の昔、宇治川の先陣争いで梶原源太景末の乗った名馬「磨墨」の産地だそうです。因みにその先陣争いの相手は佐々木四郎高綱、その馬は「生唆」です。梶原景末はその後美濃に封じられ、ここは梶原姓が多く、現知事も梶原です)

飛騨美濃有料道路、坂本トンネルを抜けるともう飛騨の国、次の「せせらぎ」飛騨川上流の馬瀬川に沿って進み、パスカル清見で休憩しました。ここ清見村は北海道と同じハープが特産、残念ながらハープは枯れていましたがハープ入りのお土産も売っていました。

パスカルの由来は聞き漏らししまし

たが、この辺は昨年松本と高山を結ぶ「安房トンネル」の開通により東京の人(有名人では菅原文太)の別荘が出来るようになったそうです。この辺から落葉松、なら、くぬぎの黄葉が見られます。白樺は葉を落し白い木肌を見せています。パスカル清見を出ると直ぐ分水嶺、標高一、一〇mです。これからは最後のせせらぎ川上川(最後は神通川となって富山湾にそそぐ)に沿って高山に下ります。

最初の目的地、飛騨高山美術館に着いたのは最初の遅れを取り戻せず、40分遅の12時になっています。ここは北アルプスと白山連峰を望む高山市内の丘陵地、昨年4月オープン真っ白い美術館が



目にしみます。早速ここで記念写真を撮りました。以下はパンフレットの抜粋です。
……この自然の景観を生かした庭園には生きた美術品とも言うべき名樹が各地から数多く集められ、四季折々の美を奏でています。
収蔵作品の中心は、歴史的に重要な作品を網羅した「16〜20世紀のガラス芸術」、「アール・ヌーヴオ、アール・デコのガラス」、そしてバリやナンシー、グラスゴウ、ウィーンで花開いた「世紀末装飾美術」などの代表作品です。世界的に有名なルネ・ラリックがパリのシャンゼリゼに作った高さ3mのガラスの噴水の他、建築家マツキントシユの部屋も再現され、エミール・ガレが当時の万国博覧会に出品したガラス作品や家具など、優れた展示室や作品が数多く含まれています。……

12時50分、昼食は新装なった高山プリンスホテルです。大野支部長の挨拶に続き、川端先輩の音頭で乾杯、懇親会に入りました。

今年1月5日、一〇一回の誕生日を迎えられた本多顧問が、お元気で9月の電気工学100周年の懇親会で乾杯の挨拶をされ、又今年も洛友会に参加された事から、恒例の会員近況報告など話は尽きませんが何分帰路の事を考えると、そうのんびりできません。

予定していた「飛騨高山祭りの森」、「地中ドーム高山祭りミュージアム」は省略し後は自由行動、高山市内の散策です。

市内観光の中心は市内を流れる宮川に掛る赤橋、宮川(先の川上川と共に神通川に合流する。飛騨の小京都高山ではさしずめ京都の鴨川)は地元高山高校の白線流しは有名です。上三の町から下三の町、更に下一の町まで昔ながらの町並みが続き、好天に恵まれみやげ物店は観光客で大混雑です。又藩主金森氏の遺品、酒醸造の道具などを収めた、市営・民営の民俗美術館、民芸館もこの町並みを壊さぬよう昔の建物そのままです。

1時間余りの散策を終えて16時帰路に就きました。「秋の日はつるべ落し」と言いますが、ここ高山盆地では一層早く、車窓の外は早や薄暮です。早朝からのかなりきついスケジュールに車窓の景色も見えず、車内はうとうとされる人も出てきました。途中磨墨公園で小休止、後は一路名古屋へ向かいます。木曾川・一宮ICを出るまでは順調でしたが、その先の22号線が又午前中を上回る大渋滞、結局名古屋駅前へ到着したのは予定より1時間遅れの20時になってしまいました。

「生きている限り参加する」の元気なお言葉に、一同来年の再会を約し、散会しました。
石川進(昭26年卒)記

平成10年度関西支部 家族見学会の報告

本年度の関西支部の家族見学会は滋賀の彦根城と琵琶湖博物館を目的地として、11月22日に開催されました。心配しておりましたお天気も帰路につくまで最近にはない陽気で、絶好の散策日和でした。本部からは近藤会長、大嶋副会長にご出席いただき、参加者は会員50名、同伴者大人47名、子供8名の計105名に世話役13名を加えて総勢118名になりました。

京都駅から9時、新大阪駅から8時にそれぞれバス2台に分乗して出発し、途中黒丸パーキングエリアで休憩して、予定より早く10時過ぎに彦根城に到着しました。彦根城の三重三層の天守閣は国宝に指定され、姫路城、松本城、犬山城とともに国宝四城の一つに挙げられる名城です。井伊直継の代に20年がかりで築城され、平成6年より始まった築城5回目の大改修を経て、雄壮な姿を今日まで残しています。

彦根城についてからは食事場所に移動する12時10分まで自由行動で、各自の体力にあわせて散策となりました。今年の2度の台風と長雨のため残念ながら有名な紅葉は例年ほどではありませんでしたが、見所はたくさんありました。入場券を受け取ると、まずほとんどの方が天守閣の方向を目指しました。天守閣内の階段は急で狭くまた滑りやすいため心配でしたが、多くの方が元気に上られ、時には若い世話役のほうに疲れてついでいけないという笑うに笑えない一幕もありました。苦勞して上り詰めますと、そこには琵琶湖を一望できる景色が広がっています。私は当日上がることができませんでしたが、参加者の方から天守閣からの琵琶湖の眺望が素晴らしかったとお褒めの言葉をいただきました。また玄宮園、彦根城博物館に行かれた方も多かったのではないのでしょうか。玄宮園は彦根城の北東に位置し、近江八景を模して樹木や岩石が配置されています。四代藩主直興が延宝5年(一六七七年)に造営したもので、その幽玄な風景は時を忘れてたはずないでしょう。彦根城博物館ではちょうど「彦根屏風」の特別展が催されています。彦根屏風」という名称は藩主であった井伊家に伝

来したことからつけられたもので、江戸時代寛永年間の風俗・人々の生活の一端を垣間見ることが出来ます。またそのほかにも当時のカルタや双六、キセルなど珍しい展示が多数あり、ここだけでも1時間では足りないほどでした。城内を1時間あまり散策して12時ともなれば次のお楽しみです。彦根城近くのお食事場所「やす井」へと移動しました。昼食は安井支部長の「京大アメフト部の奇跡の逆転を祈るとともに、洛友会会員の元気を活躍でこの不況を乗り越えよう」とのご挨拶、近藤会長の電気教室100周年記念式典の報告や新会長への就任のご挨拶ののち、大嶋副会長の乾杯のご発声で始まり、途中昭和32年ご卒業

の西台様が洛友会の歌を歌われるなど、終始和やかに進みました。お食事は琵琶湖の魚やシジミをふんだんに取り入れた懐石風お弁当と、近江牛のしゃぶしゃぶなどを堪能しました。お腹のむしがご機嫌になったら、次の目的地に出発です。草津市の滋賀県立琵琶湖博物館へと向かいました。できれば景色のよい湖岸道路を走りたかったのですが、観光シーズンたけなわのため渋滞が激しく、名神高速道路で大回りして向かうこととなりました。琵琶湖博物館は閉館時間が午後5時と決まっていますため到着が遅れば充分見て回る時間がなくなり心配でしたが、この判断が幸いしたようで、予定の午後3時過ぎには到着することができました。琵琶湖博物館は、琵琶湖への社会的関心が高まった昭和54年に、滋賀県の高等学校理科教育研究会から県に対して要望書が出されたことが発端となり準備が進められ、平成8年8月に開館した新しい博物館です。広い館内には4つの展示室があり、それぞれ琵琶湖の生い立ち、歴史、環境と人々のくらし、世界でも珍しい淡水魚専門の水族館があり、その他にもザリガニに扮してエサをとったりという体験学習のできるディスプレイルーム、また屋外にも種々の展示



があります。子供から大人まで楽しく遊びながら多くのことが学べ、一日あつてもすべて見切れないほどです。

閉館時間の午後5時まで自由行動でしたが、各自興味の赴くまま様々な場所を回りました。熱心に展示を見入る姿やお子さまと一緒に水族館で遊ぶ姿が散見され、楽しいひとときを過ごしました。

午後5時過ぎに集合し、京都・新大阪に向けて帰路につきました。朝早くから集まり、歩き回ったためかなりの方がウトウトとされていたようです。渋滞のため帰着が遅れてしまいましたが、全員無事に帰着することができました。到着後、散会の際にはみなさまから世話役に「お世話になりました」「ありがとう」の声をかけていただき、これまでの疲れが吹き飛ばすような気がしました。

最後に世話役を代表しまして、不慣れなため不備な点が多々ありましたことを、この紙面を借りてお詫びいたしますとともに、団体旅行につきものの集合時間の遅れなども全くなく、みなさまのご協力に大変感謝いたします。一年後のみなさまとの再会を祈念しております。

三宅浩二(平1年卒)記

第70回関西支部

ゴルフ競技会報告

第70回関西支部ゴルフ競技会が平成10年10月4日(日)、武庫ノ台ゴルフコースにて開催されました。9月から続く不順な天候が心配されましたが、当日は、若干風が吹いていたものの、晴天に恵まれ、昭和16年卒の加藤孝一氏が筆頭に、合計28名(シニアの部4名)が競技に汗を流しました。

結果は次の通りです。

(一般の部)

- 優勝 宇田裕重(昭34年卒)
- 2位 三宅浩二(平1年卒)
- 3位 松室憲尚(昭33年卒)
- (シニアの部)
- 優勝 中堀増夫(昭30年卒)
- 2位 藤本一夫(昭21年卒)
- 3位 奥村 徹(昭25年卒)

(案内)

第71回ゴルフ競技会は

平成11年5月30日(日) 於 武庫ノ台ゴルフコースで行います。多数のご参加をお待ちしております。

(連絡先)

関西電力 八木 誠(昭47年卒)

下田一彦(平4年卒)

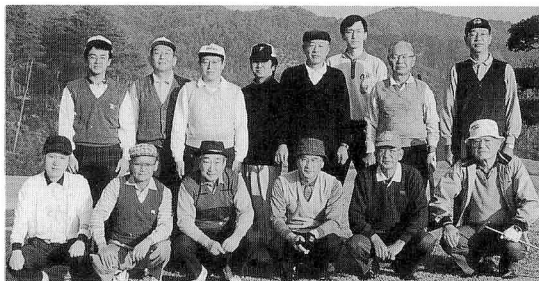
TEL 06-7501-0355

下田一彦(平4年卒)記

中国支部

第3回ゴルフコンペ開催

中国支部では、平成10年11月14日(土)鷹の巣ゴルフクラブ(広島県佐伯郡)にて第3回ゴルフコンペを開催しました。



第3回 中国支部ゴルフコンペ H10.11.14 於 鷹の巣ゴルフクラブ

一昨年から始めた当ゴルフコンペも今年で3回目となりましたが、これまでで一番多い14名の参加者によりプレーを競い合いました。当日は絶好のゴルフ日和に恵まれ、14名の参加者は終始楽しく和やかにプレーを満喫でき、会員相互の更なる親睦を深めることができました。

第3回の優勝者は、難しいグリーンに皆が悩む中、初参加でネ

ット75のすばらしいスコアを記録された高橋昭彦氏(昭和58年卒)でした。また、バスケロもドラコンも御年輩の先輩諸氏が総なめされるという大変活気に満ちた大会となりました。

当支部のゴルフコンペはまだ始まったばかりですが、中国支部の恒例行事としてさらに充実していきたいと考えています。次回以降も支部全員にご案内しますので多数参加いただきますようよろしくお願いいたします。

丸山茂(昭62年卒)記

事務局だより

○役員会の開催について

平成10年度洛友会役員会を左記のように予定しております。ご多忙のことと存じますが、本部役員および各地区支部長様又は代理の方のご出席をお願い致します。

なお、詳細については追ってご案内いたします。

○年会費の納付のお願い

平成10年度の年度末が近づいてまいりました。今年度も納付状況は芳しくなく、新年号に振込み用紙を同封させて頂きましたので、未納の方はお手数ですが、ご協力願います。

編集後記

新年おめでとうございます。年頭に当り会員の皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

平成10年は金融不安に終始し、大型倒産、失業者増大という雇用不安を背景に、あらゆる分野の業界では悪戦苦闘されました。

平成11年は「いい年」とも読め飛躍的な成長は期待出来ないものの、21世紀に向けて明るい一年となることを願っています。

本年もバラエティーに富んだ会報づくりに心掛けたく、皆様よりのご投稿をお待ち致しております。

事務局 松本 博

計 報

大13	岡田邦彦	10・6・1
大14	山崎善雄	
昭元	田中卓次	10・9・7
昭3	福山 勉	10・9
昭13	松尾三郎	10・9・1
講昭13	山本大喜男	10・5・3
講昭14	沼田伊雄	10・4・5
講昭14	松本 亮	10・1・25
昭16	安東侃一郎	10・5・7
昭19	橋本南海男	9・12・11
昭21	秦喜久雄	10・10・11
昭23	河原 滋	10・8・12
昭23	小林佐久郎	10・7・18
昭23	中澤義治	10・5・30
昭23	野村 繁	10・5・1
昭29	岩橋茂樹	10・6・22

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。